

「無からの詩学——ツェランとハイデガー」

「政治的なもの／倫理的なもの」

國重 裕（龍谷大学准教授）

連絡先 knjiga@biz.ryukoku.ac.jp

チェルノヴィッツに生まれたパウル・ツェラン（1920-70）がハイデガーの哲学に出会ったのは、ブクレシュチからヴィーンに逃れてきた 1948 年、当時ヴィーン大学哲学科で学位論文「マルティン・ハイデガーの実存哲学の批判的受容」を執筆中のインゲボルク・バッハマンと知り合ったときである。しかしツェランがハイデガーの著作を本格的に読み始めたのはパリに移住した 1952 年以降であることが、蔵書の書き込みから確認されている。Hadrien France-Lanord “Paul Celan et Martin Heidegger. Le sens d'un dialogue”(2004)および James K. Lyon “Paul Celan & Martin Heidegger. An Unresolved conversation, 1951-70” (2006)は、ツェランの蔵書のハイデガーの著作にある下線や書き込みから、彼がハイデガーをどのように受容していったかを分析した労作である。

しかし文献学的に貴重な 2 冊の研究は、やむをえないこととはいえ、ツェランの詩学そして詩作にどのような影響を与えたのか、俯瞰的に考察する視座には乏しい。そこで本発表では、ツェランがハイデガーの思索のどこに惹かれ、詩人としてみずからの関心に即してどのように摂取したのかを、ツェランの詩論「ブレーメン文学賞受賞講演」(1958)、「子午線—ビューヒナー賞受賞講演」(1960)、そしてどう時期に書かれたいくつかの詩(「テネブレ」「誰でもないものの薔薇」など)から考察する。とりわけ 2 つの詩論にはハイデガーの影響がなまなましく感じられる表現や詩学が濃厚である（批判的であったり、換骨奪胎されているにせよ）。

ハイデガーのナチスへの加担、そしてみずからの言動に関して戦後も反省の言を公にしなかったことが、哲学者とツェランの関係においても問題にされる。ツェランがユダヤ人であり、両親を強制収容所で失っており、戦後もなお根強くはびこる反ユダヤ主義に敏感であった以上、当然である。前述の先行研究のうち、France-Lanord は両者の出会いは友好的であったとする一方、Lyon はハイデガーから謝罪の言葉が聞かれなかったことにツェランは深く失望したとする。「倫理的なもの/政治的なもの」という今回のフォーラムの主旨からも、聴衆の関心の中心はこの主題にあるのかもしれない。けれども 2 人が実際に邂逅した際に何が語りあわれたかは、オットー・ペゲラーらの伝聞情報でしか分からない。それゆえ本発表では、この解釈には立ち入らない。そのかわり、先に述べた 1950 年代のハイデガーの著作へのツェランの関心が、いかなる動機に由来するもので、どのように発展し、2 つの詩論や詩として結実したかの解釈に注力する。この作業をとおして、反ユダヤ主義・ナチスの蛮行とは違う次元での、2 人に共通する「倫理的なもの/政治的なもの」があきらかにされるであろう。

「ドイツ大学の自己主張」については 1949 年のバッハマンの学位論文で触れられてい

る。ハイデガー生誕 70 年を祝う祝賀論集に寄稿を求められた 2 人の若き詩人は、この申し出を拒否するのだが、1959 年の往復書簡をひもとけば、2 人ともハイデガーのナチスへの協力に批判的な言及をしているものの、寄稿しなかった理由は別の理由（出版社との関係）だったことが分かる。したがって 1950 年代のツェランは、ハイデガーの行動を知りつつ、そしてみずからのユダヤ性についてもノートに多くの書き込みを残していたにもかかわらず、ホロコーストの問題はほとんど捨象されている（もちろん言及されていないわけではなく、以下に述べるとおり、重要な支点/視点である）。¹

ツェランはかねてよりシェストフのパスカル論「ゲッセマネの夜」に強い関心を寄せていた。とくに「*Ne nous reprochez pas le manqué de clarté*」というフレーズは繰り返しノートに引用されている。そもそも無 *Nichts*、深淵 *Abgrund* から芸術を打ち建てることなど可能か、という強い疑念がツェランの意識の根底には巣食っていた。アウシュヴィッツの惨劇のあと、ことば *Sprache* に信を置くことができるのか、詩を紡ぐ力がことばには残っているのか自問していたツェラン。そんな彼が取り組んだのがハイデガーだった。²彼が『存在と時間』(一部の章にしか書き込みが見られない)だけでなく、「根拠の本質について」「形而上学とは何か」(1929)を読み込んだゆえんである。³

「フマニズムについて」(1949)は、周知のとおりサルトルの「実存主義はユマニズムである」(1946)への論駁として書かれた経緯がある。ドイツの占領から「レジスタンスの力で自国を解放した」という興奮さめやらぬなか、返す刀でベトナムをはじめ植民地で独立闘争の弾圧にかかっていたフランス、冷戦体制が固定していく時期のフランスの政権のあり方をめぐってはげしい論争が闘わされていたフランスでサルトルが著した著作に、人間の主体性や自由に対する肯定的な文言がみなぎっていたのはむしろ当然であろう。けれども、逆に、自身を含むドイツ国民の多くが歓呼をもって誕生した第三帝国がヨーロッパを破滅に導いた現実のただなかにいた敗戦国のハイデガーにしてみれば、人間性にかかる期待は、サルトルとは正反対で、甚だ懐疑的なものだった。

いや、現存在 *Dasein* と真理 *Wahrheit* の関係は、「芸術作品の根源」(1936)で変化が生じている。乱暴に図式化するなら、「根拠の本質について」で、真理を *enthüllen* するのは *Dasein* の側であったが、「芸術作品の根源」では、真理の方が開藏 *entbergen* しつつ伏藏 *verbergen* する。「フマニズムについて」も後者の流れに棹さした思惟である。

さて、「真理アレーティア」「芸術作品」に重点を置くハイデガーの態度に対して、当時のツェランは詩人・芸術家の使命を模索していた。もちろん無、虚無からの出発が可能かという疑念と不信を抱えたツェランが、一方的な創造者の地位を詩人に認めるはずもない。ここにおいて、詩作 *Poesie, Dichtung* を、開藏しつつ伏藏する場 *U-topie* であり、また一回かぎりの行為でとしてとらえるツェランと、ハイデガーの接点がふたたび明滅する。

そろそろ結論に入らねばならない。そのためには、西ドイツの文壇そして講壇(アカデミックな場)でツェランがどのように受けてられていたかを念頭に置く必要がある。当時の詩評、グスタフ・ルネ=ホッケ『マニエリスムの文学』やフーゴー・フリードリヒ『抒情詩の構造』では、ツェランは、超現実主義のような比喩の組み合わせを多用する、極度に難

解 dunkel で、秘教的な詩人であると理解されていた。そのうえでノヴァーリスのような「夜の詩人」から、マラルメの絶対詩を経て、ことばのなかにのみ現実を認める(たとえばゴットフリート・ベン)の系譜の中に位置づけられていた。このような西ドイツの文壇の傾向は、ナチス以後の「学問の非政治化」のあらわれでもあった(エミール・シュタイガーらが主導したテキスト内在解釈など、その一例である)。

ところがツェランは、自身の詩がこのように受け取られることに繰り返し強い不快感を示していた。ツェランについてはじめての博士論文を書いたジャン・フィルジュがパリのツェラン宅を訪れたとき、「わたしの詩をシュルレアリスムの亜流に位置づけることだけはやめてくれ給え」と述べたほどである。

本発表の最後には、「ブレーメン講演」「子午線」をハイデガーとの関係性を軸に読み解いた上で、ツェランの詩をいくつか読解し、アデナウアー体制下、学問の非政治化を標榜しつつ、再軍備に踏みこんでいく 1950 年代の西ドイツ(過去との取り組みも含む)に対して、ツェランの詩がこめた政治性・倫理性をあきらかにしたい。この時期のツェランがとった詩学の政治性／倫理性が、技術論を語るハイデガーの立場と類縁性を示していることが証明されれば、なにゆえツェランが、ハイデガーのナチス加担を知りながら、もっぱら哲学者としての受容に集中した理由も、おのずと浮かびあがってくるのではないか。

¹ ツェランが反ユダヤ主義に対し寛容だったわけではまったくない。たとえば 1952 年、Gruppe47 の集会の折り、作者自身の「死のフーガ」の朗読の口調を「ゲッベルスの口調のようだ」と軽口を叩かれたときに、激昂している。1956 年にはアラン・レネ監督のドキュメント映画「夜と霧」のために書かれたジャン・ケイロール——自身もレジスタンスに参加し、マウトハウゼン強制収容所に送られた経験を持つ——のテキストを独訳している。しかしツェランが強く反撥するようになるのは、1958 年マンデリシュタムの詩を読んだこと、同じ時期ツェランがクレール・ゴルから剽窃疑惑をかけられ、西ドイツの文壇を巻き込むスキャンダルになったことが転換点になった、と筆者は考えている。そしてフランスに住んでいたツェラン——レジスタンスの闘士でもあった詩人ルネ・シャールとも交友があり、翻訳もしている——も 50 年代の終わりには、西ドイツであきらかにされていったナチス時代のハイデガーの言動を目にする機会があったと推測できる。……にもかかわらず(あるいは「だからこそ」)、この時期のツェランのハイデガー受容に、批判が希薄なのが際だって見えるのである。そして 1960 年代に入ると、両者は新著を出版社をとおして贈呈しあうようになるが、ツェランの蔵書のこの時期のハイデガーの著作には、もはやほとんど書き込みはないという。本発表が 1950 年代のツェランに着目する理由の 1 つである。

² Lyon は、ハイデガーの著作のなかのヘルダーリン像から、詩人として生きることの自信を得たと述べている。パリに移ってきたばかりの彼には知己も少なく、翻訳や語学教師などでほそぼそと生計を立てていた。今回は、論点を明確にするためハイデガーとツェランのヘルダーリン理解については言及しない。

³ バッハマンの論文が対象にしているハイデガーの著作は主に「形而上学とは何か」である。バッハマンとハイデガーについては、拙著『ことばの水底へ——「わたし」をめぐるオスティナート』(松籟社、2017 年)、拙論「《無》の詩学—バッハマン、ツェラン、ハイデガーを繋ぐ糸」(『希土』第 43 号、2018 年)、「《深淵》の詩学—バッハマンとツェラン」(『龍谷紀要』刊行予定)を参照。